



リステラス星圏史略  
古資料ファイル  
7-5-0



「惑星の夜明け」  
(1982～1984頃)

(最終稿＋没原稿)  
(発掘整理一旦完了)

霧樹里守 is 土岐真扉  
as  
恒沙真谷人⇒遠野真谷人



# 目次

【 移転 の お知らせ 】	1
（最初期？ 設定資料）（もはや全く別の話...）	
『 1. 国境の町. 』（@専門学校？）	5
（同人誌既発表原稿）	
（最終稿）	
（最終稿）	11
（1）	12
（2）	16
（3）	24
（4）	28
（5）	33
（6）	37
（7）	42
（8）	46
（没原稿）	
（没原稿）	55
「星の夜明け」 by 恒沙真谷人 （没原稿・A）	56
「星の夜明け」 （没原稿・B-1.）	60
「星の夜明け」 （没原稿・B-2.）	67
「星の夜明け」 （没原稿・B-3.）	73
「星の夜明け」 （没原稿・C.）	76
「惑星の夜明け」 （没原稿・D-1.）	79
「惑星の夜明け」 （没原稿・D-2.）	85
（設定資料）	
ケイニー。無気味がられて両親には捨てられ、叔父のところで働く。	89
（借景資料集）	
奥付	
奥付	95



## 【 移転 の お知らせ 】

- ☆
- ☆ 超～大幅に？ 加筆&改稿中の2023年版、
- ☆
- ☆ こちらに移転しました。
- ☆
- ☆
- ☆ 『エスパッション・シリーズ』
- ☆
- ☆ ... 惑星の夜明け ...
- ☆
- ☆
- ☆ <https://novelpia.jp/novel/1155>
- ☆
- ☆

=====

地球の旧暦（西暦）で言うと3500年代ぐらい（だっけ？）の御話です。  
隣接する2つの文明圏との衝突～統合に至る激動が始まる、ちょっと前。  
ESPがまだ未公認だった時代の、  
歴史を動かした少女たちの、始まりのエピソード。

（発掘整理一旦完了）。

=====



(最初期? 設定資料) (もはや全く別の話...)





『 1. 国境の町. 』 (@専門学校?)

<http://76519.diarynote.jp/200704220100040000/>

2007 年 3 月 5 日 [http://76519.diarynote.jp/?theme\\_id=5](http://76519.diarynote.jp/?theme_id=5) <http://76519.diarynote.jp/200704220100040000/>

1. 国境の町。

辺境惑星リネークーラは雨。

「.....あ〜あ、あ。」

ようやくと雨やどりに手頃な場所をみつけて駆け込んできた彼女は大きなため息をついた。

服もカバンも防水加工だから構わないけど問題なのは、髪。やたら長いのが面倒で高々とポニー・テールっぽく結わえておいたのが見事に裏目。水を含んで重いつたらありゃしない。

「携帯式乾燥器、貸そうか？」

雨宿の先客が声をかけた。

「ついでに暇つぶしのお茶の 1 杯くらいにもおつきあいいただけると嬉しいんだけどな。」

籠っている幌（ほろ）のうしろは居酒屋。

御注文はの到着をお待ち申し上げる間に個室を借りて、長い髪はすっかり復調したようだ。

「わたし、サキ。お宅は？」

「ソルデネーレ、ルイッククセス。古めかしい名前だろ。」

「る、ルイックあく.....」

「ルイッククセス。」

「地球人（テラズ）にはその発音は無理だよお。」

「へ？ キミ地球人!？」

「そ.....見えないだろー。」

少女は（

(草稿未完).

### コメント

<http://76519.diarynote.jp/>

りす

2007年4月22日 0:56

.....ていうか、こんな草稿、書いてた事自体が記憶にナイ★  
どうやら例のサキの「初恋」のエピソードの超初期形らしいけど.....「惑星リネークー  
ラ」のエピソードは七転八倒した挙げ句に星の名前も「リネアクライン」に変わっちゃっ  
てるし、サキのロストバージョンも17歳から遡って14歳ぐらいに早まってるし.....(を  
い★)

「物語」って.....書かない間に千変万化に流転しちゃうシロモノなん  
だなあ.....(◇;) ”

(同人誌既発表原稿)



(最終稿)



(最終稿)

(最終稿)

# (1)

“エスパッション・シリーズ” vol. 1.

ほし（惑星）の夜明け ... A Dawn of A Planet ...

遠野真谷人

...惑星リネアクライン。

“星間連盟”と呼ばれるリスタルラーナ世界の、主要な航路からは大分はずれた、辺境の星である。

と、云っても“開拓惑星”と名付けられるほどにはもう若くもない。

最初の入植者がロケット（逆噴射）の炎で大地を焼き焦がしてから、もう二〇〇〇年...

農耕地の多いのどかな風土とは言い条、惑星首都はそれでも億のオーダーの人口を抱える。

それなりの矛盾や小暗い部分をも合わせ持ったメガロポリス（巨大都市）なのである。

うらさびて老朽化の目につくようなスペースポート（宙港）に、その未明、少女がひとり静かに降り立った。



手荷物は大きなショルダーバッグがひとつ... “大きい” とはいえ数週間もの長旅の装備とはとても思えない。

身軽に入国手続きのカウンター（窓口）を通過すると、少女はスタスタと、その年頃の娘としてはかなり大股の早足に宙港の構内を横切って行った。

雲のような不思議な淡灰色のポニーテールが歩くにつれ肩のあたりで踊る。長すぎる前髪がぱさりと落ちかかって、顔の左半分を頬のあたりまで薄く覆い隠してしまっていた。

背がすらりと高い。

軽く袖をまくりあげたオフホワイトのざっくりした上着に、髪と同系の灰色のパンツスタイル。

およそ **色気**などは葉にもしたくないといった服装のサキは、少女らしい引き締まった曲線を描く四肢をいっそ小気味がよいほどに無雑作に動かしていく。

この星へ訪れるのは初めてではないのか、それともの筈なのだが、船中ででもあらかじめ地理を頭に叩きこんで来たのか。

足どりにわずかなためらいすら見せず、少し古びたメガロポリス（惑星首都）のほの暗い根元へと、彼女は直ぐに溶け込んで消えてしまった。

早暁のこととて街の自走路は未だ停止したままである。

(.....ふう。結構、歩いたなー...)

サキがふと足をとめたのは、自転のゆるやかなリネアラインで、ようやく一番高いビル群の頂きが朝陽の金色に染まろうかという頃だった。

ほの白い蒼さに沈んだ街角。

大分、“旧市街”と呼ばれる下町区域に近づいたこの辺りに、この時間ひとの姿はない。

シュンッ。

圧搾空気が噴き出す時のような特異な音が生、不意に背の高い人影がサキのすぐ後ろに出現していた。

一瞬前には確かになかった人影が。

「...やあ、レイ。来たよ。」

驚きもせず振り返って響きのあるアルトの声でサキはニッと微笑う。

現われた人間...紙のように白い肌、金色の眼に青い髪、という、常識外れに背の高い少女...は唇のはしを吊りあげて応えた。

「あと、任すぜ。あたしは直ぐジースト側に跳ぶ。」

「ん。ごくろーさん。」

そしてまた、微かな空気音を残して、そこにはもう誰も居ない...

一陣の風が吹く。

「やれやれ、もう、二ヶ月振りだってのに。」

ちょっと複雑に苦笑を洩らして、長すぎる、未だ分け目の落ちつかない前髪をかき上げた。

その柔らかい指のかげに、瞬間見え隠れする奇妙な輝きの銀色の左眼。

ぱさっ、と髪の一房が落ちかかって、もとの優しい灰色の右瞳だけの貌に戻ると、サキは軽く肩をすくめて再び歩き始めた。

(参照したければ資料)

<http://85358.diarynote.jp/201612312332312241/>

<http://85358.diarynote.jp/201612312332312241/>

2016 年 12 月 31 日 [http://85358.diarynote.jp/?theme\\_id=18](http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18) <http://85358.diarynote.jp/201612312332312241/>

## (2)

造りつけの戸別の店舗用ダスト・シュート（ゴミ処理器）はこの十数年来というもの、動いた事がない。だから毎朝一番に数丁先の集積場... 処理施設まで直結の、ガタのきかけた大型コンプレッサがある... へ、前日の生ゴミをぶらさげて往復するのが彼の日課になっていた。

ゴミ捨てから戻ってきて皿を洗う。

彼＝ティルニーは今は泡を飛ばしながら **手で**皿を洗っている。昨夜の宴会で使った変型皿が大判すぎて機械にかからないのだ。

いや、もちろん大皿用のウォッシャーも昔はちゃんとあったのだったが...

御多分に洩れず、今では厨房の片すみで粗大ゴミとなり果てていた。

(.....あれ、)

見なれないものが視界に飛び込んできて手が停まる。

朝の早い場末の食べ物屋では、そろそろ夜業明けや早番の労務者たちの食事時間が終わって、一段落つこうかという刻限である。

乳白色に埃の舞う店内にようやく射しそめてきた朝陽の黄金のなかから、ふいと湧いて出るように店に歩み入って来たのは...

サキ、である。しかし無論、ティルニーは知らない。

彼に判ったのはそれが非常に若い、むしろ稚い、と云うにふさわしい年頃の女性であるということ。すらりとした身なりは無彩色の地味な、しかし白と淡灰のコントラストが薄暗い店のなかではかえって清楚な輝やきを見せる。

スラムにも程近いようなこの辺りでは決して御目にかかれぬ、きちんと金をかけた洗練されたスタイルだ。

そして...

なによりも強烈だったのは、そのすっきりと背すじを伸ばした印象的な立ち姿立ち姿の印象だった。

驕る、というのではない。

自然ににじみ出る人間の器。...おちつき（自信）のようなもの。

さき（将来）の望みの薄い旧市街区には若い娘の姿は少ない。まして己れに矜持を抱けるような、光を秘めた少女は。

...そんなわけでティルニーはつい少女に心を奪われた。

呆然と見とれたままの状態で洗った皿を頭上の棚に戻そうとし、その手先が...

つるりと滑った。

軽く足を組んで腰かけて、オーダー（注文）パネルに目を走らせていたサキは、不意に店内の空気が電荷を負ったように息苦しく張りつめるのを感じた。

顔を上げるより早く、ふわっと中年の男の“感覚”が、遠くの津波めいてサキの精神の周囲に押し寄せてくる。

...驚愕、疑念、不信、恐怖。

カウンターの向うのその男はどうやらこの店主らしかった。

同じ調理場の中で、やはり凍りついたように動けなくなってしまった、青年（ティルニー）が居る。

（……………！）

店主の思念はなおも渦巻いている。

サキはテレパシー（心話）能力は大した素質はない。その彼女に読もうと意志する間もなく波動がとび込んで来たというのは、それだけその感情の主の、ショック（動揺）の大きさを現わしていた。

大皿は重力法則を無視して宙に浮いている。

ティルニーの眼は死んだように虚ろだった。

（……………識っていたな、彼自身は）

自覚して、ずっと、隠していたのだろう。異端者であることを。

胸の奥底に痛むような同情を覚えた。

サキにはこれがお慣染みの情景である。手を使わずに物を動かす能力を持ってしまった者達の、必ず出会う悲劇。親しい人間がまるでゾンビ（死霊）にでも捕えられたような眼で、自分を見るのだ。…

よみがえりかけた過去を振り払って、サキは大皿に軽く意識を加えた。思考を向けた。引力を思い出させた。

…パリーーーーーーン！

硬直したティルニーが為すすべもなく支えたままでいた古い、飾りつきの大皿が床の上で碎け散った。

はっ、と、太った店主が身じろぎする。

ティルニーの能力に干渉して危うい均衡を破った張本人サキは、すかさず立ち上がってよく通る豊かな声をかけた。

「親父さん、ここの上、宿になってるんだろ。部屋を借りたいんだけどな」

「え、」

呆然としたまま、店主はひきつったように僅かに客の方を向いた。

「いつまで居るかは判らないけど、十日分、一応前払いで渡しとくよ。……ほら！」

下町の通貨の中でもっとも大きい、五千リステルの硬貨がキラリ、と青銀の光をひいて空を渡った。

「…こりゃ、毎度っ」

相好を崩して気の良さそうな店主は鍵束に手を伸ばす。

回転しながら輝くものに意識を引かれた注意をそらされた瞬間、たった今の出来事は記憶の底に封じ込められていた。

サキの心話能力はごく微弱なものである。他人の精神操作をするほどの技量はない。

これはコインを使っただけの突嗟の催眠術…彼女の特技というに近かった。のひとつ…だった。

「いいよ。親父さん忙しいんだろ。ほらお客。」

云って、店主の選り出した鍵をすいっとすくい取る。

振り返って、ティルニーに、

「案内してくれる？」

鮮やかに 鮮烈な印象で、ニッと薄く微笑った。

ティルニーはと云えば、未だ蒼冷めている。

どうやら状況がよく呑みこめていないらしい。

…と、こっそり横目で観察してサキは思った。

ドアをあければ壁の建築素材がむき出しの、寝て起きるだけ、といった簡素な造りの部屋である。

機械仕掛けのようにぎくしゃくと空調やらシャワーやらの使い方を説明し始めた彼は、サキ程度に身なりのととのった少女が何を好きこのんで場末のこんな木賃宿に部屋をとるのか、疑問に感じてみる余裕もないようだった。

サキは無頓着に荷物を寝台の上に放り投げる。

「……………ティルニー？」

「えっ!？」

カギ（名前）は、すでに店主の意識から盗み出してあった。

いきなり呼ばれてキョトンとして、ようやく他人に注意を向けられる程度に心を開いた彼にめがけて、

ヒュッ。

顔の中央を狙ってサキの素早い手が何かを投げつけた。

「わっ?!」

いつの間にくすねてきたのか、厨房の卵である。

「??」



突嗟に避ける間もなく腕をあげた、その彼の面前で、しかし薄緑色の卵はぶつかることなく 静止してしまった。

「!!」

一瞬の呼吸をおいて自然落下する。

割れる！ と、思った瞬間、コトンと乾いた音をたてて薄い殻の卵は床にはねかえり、ころころと二～三度バウンドしたあと、くるっと回転して止まった。

「……………あ。―――」

ティルニーはあえいだ。

それが尋常な動き方でないことくらい、馬鹿でもわかる。

「まあ、卵でこれをやるには多少無理があるかも知れないけどさ、」

ひょいっとサキは肩をすくめた。

「コツは解った？ 落下地点に“クッション”をあてて衝撃をやわらげる。と、お皿が割れないのは 運がよかった、て風に見られるからね。  
空中で停めてしまうよりはずっと巧い方法だと思うよ。」

……酸素の足りない金魚のようだ。

ティルニーの顔を見て、内心くすりと笑った。

「…なんで……どうして……僕以外にも……」

パニック。

…人類が初めて宇宙に足跡を記してから五千年、というリスタルラーナ文明圏には、すでに神話・伝承といったものは形をとどめていない。超心理学に類する概念もない。

それが、どうして、というのは謎だった。

ここ数十年で多発しているゲン・ミューテーション（遺伝子突然変異）。

リスタルラーナ各地で、実はティルニーのような人間が増えてきつつあるのだ。（彼らはお互いの存在も、自分の能力の正体も知らない。）

一般に温和で常識的なリスタルラーノ（リスタルラーナ人類）の中にあって、特異な思考パターンと強靱な精神力を備えたミュータント（変異体）たち…

それを、“新人類”とか“種族の転換期”といった風に、サキの師である博士は言うけれど。

「あなた以外にもいるし、わたしだけでもないよ。」

手をさしのべると呼ばれた仔犬さながら、床上の卵は一直線にサキの掌に吸いこまれた。

バッグからペンを出して赤い丸印をつける。

「実のところ、わたしらはこういった仲間ばかりで、ふね（星間船）で暮らしててね。

『エスパッション』て呼んでるんだけど。

もしあなたが、ここは居づらい場所だって考えてるんなら。

…考えておいてよ。」

印つきの卵が掌上からフツとかき消える。

「ついでに言うと、あのマスター（店主）はさっきの一件はすっかり忘れてて、多分二度と思い出さないだろうとは、思うけど、ね」

灰色の片方だけの瞳が心持ち同情をこめてティルニーを見ていた。

今頃は調理場で赤い丸印つき卵が発見されているだろう。

サキは荷物を開けながらかすかに笑った。

デモンストレーションとしては...

でも少し刺激が強すぎたかなあ。

リスタルラーナには存在しない言葉の、“運”とか“縁”とかを信じる方たち（性）である。

偶然、足の向いた飯屋で仲間に出会えたこと...

これは、どう考えても、ラッキー（幸運）。

「ふふん」

今回の件、きつとうまくいく。

鼻唄まじりに必要な物をふたつみつ身につけて、どこへともなくサキは姿を消した。

(参照したければ資料)

<http://85358.diarynote.jp/201701041750239568/>

<http://85358.diarynote.jp/201701041750239568/>

2017 年 1 月 4 日 [http://85358.diarynote.jp/?theme\\_id=18](http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18) <http://85358.diarynote.jp/201701041750239568/>

(3)

(.....あのお客さん.....)

名前は宿帳で調べてあった。

サキ・ラン。

不思議な響き、不思議な髪、不思議な瞳のいろどり（彩）。

なんとなく使いづらくて除けたままになっている、赤い丸印の卵をちら、と見やった。

それは、驚いたけれど。

階上の部屋から冷蔵庫のカートンの中へ、どうしたら卵が移動できるものか。

でも、けれど、ティルニーは納得してしまったのだ。

不可能ではない、ことだった...たぶん自分にも...

(他の人には、絶対にわからないだろう)

神話もSFもない世界で、ティルニーはもうずっと自分の存在が無気味だった。本能的に、これは人に見せてはいけないものだと、ひた隠しにして来たのだ。

初めて“力”に気がついたのはまだほんの子供の頃だった。野良犬に襲われて...

追い払えさえすれば良かったのに。殺す必要は無かったのに。

高熱を出して何日もうなされたのを覚えている。

無気味な力はまた危険なものでもあった。

(ショックを受ければ、暴走する。僕はいつか、無意識のうちに人間をだって殺してしまうかも知れない)

そんな想い、ひそかな恐怖は、彼をもの静かな、滅多に感情を表に出さない青年に育てた。

本当に、長いこと、怯えて暮らしていたのだ。

(でも。)

同時に、持っている能力を使えない、という事は、脚のある人が車椅子に縛りつけられているような、見えているのに目隠しされた振りをして、落とし穴に飛び込もうとするような...不自然な状態で。

(.....ふう。.....)

どさっ！

サキはベッドの上に体を投げ出した。

腕をさし上げて時計の日付を読む。

もう四日。四日も無駄に時間を過ごしてしまった。

(う〜〜っ)

相棒のレイならどう酷評するか、大体見当はつく。

「アホ」とか、

「無能」とか、一言。

いつだってそういう時には的確な一単語をしかレイは口にはしない。

それでもってひたすら底意地の悪い細い金色の眼で、実にながながとした雄弁な一瞥を

くれるのだ。

(……………そんなこと言ったってさ！)

頭の中で抵抗を試みた。

(素人をスパイ(探偵)ごっこなんぞに狩り出す方が悪い！ リスタルラーナ側は受け容れ組織は小さいから“簡単”だろうって… そりゃ、あくまでも **おたくの** 基準でしょうが。)

レイは戦士としては **超** のつく一流である。

破壊工作のエキスパートだ。

もっとも、それに比べれば経験において大分落ちる、というだけで、サキとても“素人”とは決して呼べないだけの基本技術は叩きこまれているのだったが…

(… う〜〜〜っ)

もういっぺん、唸ってから体を起こす。

とにかく期限はあと二日。

責任転嫁してても仕様がなない。

階段をかけおりて行くサキのかたわらで、床を掃く。

ティルニーは迷っていた。

…… ずっと……

(参照したければ資料)

<http://85358.diarynote.jp/201701052002064288/>

<http://85358.diarynote.jp/201701052002064288/>

2017年1月5日 [http://85358.diarynote.jp/?theme\\_id=18](http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18)

(4)

しまった。それはない。

サキは張りついていた二階の窓枠から飛び降りて走りはじめた。

ようやくアジト（本拠地）を見つけた。と思ったら発見されてしまったのだ。

あまつさえすでに取り囲まれていたりするらしい。

「この、ドジ。」

レイの冷やかな表情が頭にちらついた。

..... え〜い、五月蠅い!!

とは云え、本当に少しまずい状況ではあるのだった。

そこは、スラムもスラム、最下層の人間でさえもはや住まなくなった完全な廃墟の、更にその奥だった。

かわいた風が吹く。

リスタラーノは何であれ再生・修理してまた使う、という発想を持たない。

土地や家屋、ひどいのは都市そのものでさえ例外ではないという事で、より新しい機能、より良い環境のコンパートメントへと、富裕な順からどんどん移って行ってしまう。

相対的に価値の下がった設備の古い区域が“旧市街”と呼ばれ、貧しい人達が住みついて、動力その他の生活手段がストップしてしまうまで、使い続けるものなのだが...



この辺りには、そういった人影すらない。

(…前。右、左。後ろ… 上。)

ただ走るふりをしながらサキは透視した。

(……まずいな。完全に囲まれてる。)

相応に後ろ暗い真似をしている組織であってみれば当然の事ではあるが。

往来に足を停めて相手の出方をうかがう。

テレポートして逃げられれば話は簡単なのだが。

しかし…

今回の件はいわゆる“超常能力”に関する知識のまったく無いリスタルラーノを相手にしているのとは違った。

この状態で、下手な逃げ切りかたをした日には、正体がばれる…

というよりは、あらぬ方に迷惑をかけてしまう事になる。

ためらう隙に、

ビシッ!!

熱線が、つい今まで立っていた地点に突き刺さった。

路地に転がりこんで、銃を抜く。

射撃の腕にはある程度、自信はある。

…人間に向けたくはなかったけれど…

カチリ。

サキはセーフティ（安全弁）を引き起こした。

撃つ。

一対数十の、どう考えても不利な銃撃戦である。

「一拍遅れるくらいで丁度いい。あせるより、初心者は着実に仕止めろ。」

そういう教わり方をサキはした。

一発必中、百発...これはまだ九十八中くらいか。

極力、エネルギーの無駄な消耗を抑えた戦いぶりである。

実戦経験が少なく、まだはっきり相手方の火線を（怖い）と感じる彼女であってみれば、その自己統御ぶりは大した精神力であると言える。

ただし、指導者役であるレイが知ったら怒る以前にあきれかえって理解不能、という事になるだろう。

ハンター（狩人）の主義は一撃必殺。

しかし、サキは、決して謂わゆる“急所”を、人の命にかかわるようなポイントを、狙おうとはしないのだから。

(...それでも、銃をはじき飛ばしただけで済まそうって云うのは、無謀なんだろうなあ)

正確に相手の肩を射抜きながら、顔をしかめた。

エンパサイズ（感情移入）が激し過ぎてコントロールの利かない傾向がある。

はっきり云って赤の他人が怪我する所を見ただけで、自分も苦痛を感じる、といったタチ（性向）なのである。

(...う〜〜。痛いっ!!)

内心がわめくのは努めて聞き流して、包囲網の一角にそれとは気づかれぬよう、徐々に

穴を開けていった。

三十六計。

逃亡経路を突嗟に組み立てた。

そう長く逃げまわる必要はない。脚力には定評がある。

要は、テレポートをかけても怪しまれずに済むだけ、彼らを引き離せばいいのだ。

……………深呼吸。

カウントをとって走り出す。

ジャンプして、軽い体は道の反対側へ。

転げ込みながら応射して、連続動作で立ち上がり、死角へ入った瞬間には、早や、走り始めている。

サキの全力疾走にかなう奴はそういない。

「追えっ。生かして帰すな！」

(……………怖いなァ)

苦笑を浮かべて、少女は走り続けた。

ヒュンッ。

追手のブラスター（熱線銃）が肩先をかすめる。

……………。

empathy : (心) 感情移入。

empasis : (感情・表現などの) 強さ。

(参照したければ資料)

<http://85358.diarynote.jp/201701052135439945/>

<http://85358.diarynote.jp/201701052135439945/>

2017年1月5日 [http://85358.diarynote.jp/?theme\\_id=18](http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18)

(5)

グラスを磨く。

ひとつひとつ、丹念に。

「...ティルニー」

声をかけられて彼は驚いた。

「伯父さん」

...店主である。

早朝から深夜までやっているこの店には、手が二人分しかない。

だから朝の準備と夕方の仕込みだけは一緒に済ませて、日中いっぱいティルニーが、夜は店主が、それぞれ一人できりもりするのが習慣になっているのだが。

「もう、起きてきちゃったのかい...?」

昼下がり、といった刻限である。丁度ひまになる時間だ。

「いや、その一、なんだ。寝そこねてな。」

「そう」

ティルニーは少しおどおどとして相手を眺めた。

サキが、彼は二度と思い出さない、と言ったのはどうやら本当らしい。

店主はこの間のことなど完全に忘れ去って、いつもと同じように気のいい親父ぶりを発揮している。

.....でも。

と、ティルニーは思ってしまうのだ。

相手がたとえ覚えていなくとも、自分は忘れられない。

あの、複雑な恐怖に満ちた、眼。

自分は怪物なのだ、と、あの時ほど痛烈に感じさせられた瞬間はない。

“伯父さん”はティルニーの存在を否定したのだ。...

...そういう風に一旦こだわりはじめてしまうと、とてもいつものように素直に振る舞えるものではなかった。

それに、ここに居る限りは、いつまた同じ失敗、同じ瞬間に、出喰わすことになるか...知れたものではないのだ。

(( わたしらはこういった仲間ばかりで、ふね（星間船）で暮らしててね。  
“エスパッション”で云うんだけど... ))

想いは、また同じ科白の上に帰って行ってしまう。

光明。

異形の者同士で暮らしたら、少しはこの寂しさは埋められるのだろうか。

「手伝うぞ」

ティルニーの重苦しい沈黙に耐えかねたように、太った親父はグラスの列に腕を伸ばした。

「なに、一日や二日寝なかったところでこたえやせんて。わしはまだまだ若いんだぞ」

「……………」

無口な甥の胸のうちとは別に、彼は彼で妙に肩身の狭いような、困惑しきったような顔をしているのだった。

「その… なあ。ティルニーよ。あんまり気を落とすんじゃないぞ。」

「…え？」

ティルニーは不審気に、心持ち警戒して視線をあげた。

「今さっきまで隣のルノ爺と話しとったら、…その、レニが嫁に行っちまうそうだが… そりゃこの界限にゃ珍しく、気立てのいい別嬪だったが、…その、」

「レニが結婚?! 本当かい。そりゃあ目出度いや」

「あの娘ばかりが女って訳でもなし…………… へ？」

「相手は？ やっぱりスラウかい。それとも」

「す、スラウだけどよ。…何だおまえ、知らなかったのか? …… じゃ、ここ2～3日、いやに落ち込んでるみたいだったのは、何なんだ。」

「え、おれ… 別に。」

「落ち込んでなかったなんぞ言うなよ。おまえは、どっから見ても、絶対に、確実に、どっぷり落ち込んだったぞ。」

「…そう… かなあ… 」

力一杯断言されて、ティルニーは困った顔をして、ようやく微かに笑った。

「ほれまたそう誤魔化すんだ」

いい歳をした親爺が拗ねてブツブツと。

「大体おまえは暗いぞ。何も表に出そうとせん。人間ならたまに少しは泣いたり怒ったり

してみたらどうだってェんだ」

「…………人間じゃなかったら？」

「へっ？」

「いやあの… おれって時々、海行ってクジラか何かになりたいなあ…って。」

オキアミしか食べんから。

「こら、」

珍しい甥っ子の“冗談”に店主は機嫌よく応じた。

「クジラダロートシャチにだろーと、なるのは勝手だが、おまえにはここ（店）を継いで貰わなきゃならないんだぞ。海に行くのはやめとけ

…それで思い出したが、おまえ結婚しろ。」

「えっ！…?!」

「おっ。紅くなったな」

手を打って喜ぶ。

「二十八にもなって男がわびしくひとり身でいるもんじゃねえ。もっとも、おまえの童顔は、とても齡のとおりじゃ見えんがな。」

(参照したければ資料)

<http://85358.diarynote.jp/201701052209054269/>

<http://85358.diarynote.jp/201701052209054269/>

2017年1月5日 [http://85358.diarynote.jp/?theme\\_id=18](http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18)



(6)

(...うう。)

知っている限りでなるだけひどい悪態をついてやりたい気分だった。

深夜。

サキは血まみれの腕を押さえてのろのろと裏道を歩く。

敵もさるもの、一日中追いかけて回されて、なんと廃墟のあの奥からここまで、自分の足で(!) 駆け通すはめになってしまった。

ちょっとしたマラソンなみの距離である。

相手がリスタルラーノ **ではない**というのを計算に入れなかったのが失敗だった。

やっとどうやら巧くまけたようだが...

撃たれた左上腕が精神統一を乱して、宿までのあと五百メートルをテレポートも出来やしないのだ。

ついでに、失血多量で、そろそろショック(貧血)症状を起こし始めていた。

((...レイ!))

最大限に呼びかけてみてもこの惑星上に相手はいないのだ。

いくら彼女でも、何十光年という冷たい恒星間を、ジャンプ(跳躍)はできない。

宿まで、あと、二百メートル。

ずずず、と明かりの切れた街灯にもたれて、坐りこみながらサキは思いつく限りの名前を呼んだ。

(( ティルニー !! ))

何処からともなく、寝つかれずにいる彼に、その声は届いた。

寝返りをうって耳を澄ませしてみる。

何も聞こえはしない。

階下の店のざわめきとは別に、しかし、確かにそれは脳裏に響いたのだ。

一度だけで十分だった。

ベッドを抜け出し、勘だけを頼りに方向をさぐり当てて来た彼に、サキは精一杯強がって元気に手を振った。

「怪我をしてるんですか!？」

半信半疑の足どりが急に駆け足になる。

「ありがとう。血が止まなくてね」

軽々と抱き上げられて関係もなく苦笑した。

実際、リスタルラーノはどれもこれも平均してみな力が無い、などと、地球人の誰が最初に報道したのだろうか？

それは機械文明に浸り切った上層階級の姿をしか見ないからだ。

旧市街の人々は、今でも人情が厚くて騒がしい。

労をいとわない働き者ばかりだ。

...サキはいつだって下町でのしごと（任務）が好きだった。

「すぐに医者が来ますから」

応急手当のあと、一旦階下を下りて行ったティルニーがまたドアを開ける。

「貧血おこしてるでしょう。それまでに少し胃に入れといた方が... お客さん！」

いかにも消化の良さそうな心づくしの湯気のとつお盆を、しかし彼は扉を閉めて振り向いた途端にあやうく取り落とすところだった。

サキはベッドから起き出ているのである。

すでに血で汚れた服は取り換えた後らしく、オフホワイトの袖なしにミニスカートとブーツ、といった勇ましい出で立ちだ。

腰には補填しなおした麻醉銃を吊り、鏡の前で手早く髪をまとめなおしている所だった。

雲のようにあいまいな灰色の滝が揺れる。

「何をしてるんですか...」

半ば呆然として呟く。

先刻までは確かに、起き上がる力もないみたいだったのに...

そういえば顔の色も戻っている。

「...え？ なにが？ ...やあ、有難いな」

灰色の髪をなびかせて振り向いたサキはお盆のうえの食べ物の湯気を見て、いつものように微笑った。

「...まさか...ブースター（賦活剤）を使ったんじゃないでしょうね、お客さん」

一種の覚醒剤だ。

「まさか。... “サキ” でいいよってば」

頓着せずにお盆に取りついている。

「とにかく、駄目です。ベッドに戻って下さい。いま医者を呼びにやっていますから…」

「悪いけど、パス」

感謝の苦笑いに誤魔化して、けれど途方もなく強い光をたたえて眼を上げた。

「夜明けまでに何としても片付けなきゃならない仕事があるんだ。わたしの不手際で遅くなっちまってね。大人しくしてる暇、無い」

「だけどその傷で」

「一応、ふさいだよ」

直感で、ティルニーはその科白が卵を跳ばしたあの“能力”と関係のあるものだと悟った。

「痛み止めが効いたからね。精神集中さえ出来れば、このくらい」

「薬が切れたらどうするんです」

「……………はは」

ひきつり笑い。

実はすでに痛みは戻ってきつつあるのだ。

もともと人工の薬は嫌いで、体が拒絶するのか効果があまり持続する方ではない。

「何の用かは知らないけど無理は…」

「そこで、さ。力を貸してくれる気って、ない？」

……………。

一瞬の沈黙。

サキにもし色気と呼べるほどのものがかけらでもあったとしたら、開きなおって薄く唇の端を吊り上げたそのアルカイク・スマイル（笑み）は、“婉然”とさえ表現するべきだったかも知れない。

ティルニーは、気圧された。

(参照したければ資料)

<http://85358.diarynote.jp/201701052247103290/>

<http://85358.diarynote.jp/201701052247103290/>

2017 年 1 月 5 日 [http://85358.diarynote.jp/?theme\\_id=18](http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18) <http://85358.diarynote.jp/201701052247103290/>

(7)

「このところ世間の動きが何かと不穏でしょう。強盗だの、大規模なハック(※)だの」

深夜の街路に忍び出しながらサキが言う。

「ニュースカセットには載らない事だけど、裏側の...犯罪者組織なんかの社会がやたらに活発化しててね。その台風の目のひとつがこの星にあるらしいってんで、わたしの相棒が先に調査に来てたんだけど」

「ここに...リネアラインに?!」

「うん、そう」

ティルニーの反応を彼女は面白がっていた。

辺境の、なんの変哲もない、どのかな農耕惑星。

少し退屈で、くすんで、だけど平穏な...というのが住民の抱いている故郷へのイメージなのだろうか。

確かに今まではその通りだったかも知れない。だけど。

「この時間だともう公共の交通機関は動いてないなァ。」

“跳ぶ”よ、また痛くなる前に」

云いも果てず無事な方の右腕でティルニーを引き寄せる。

と、彼らの周囲で、唐突に風景が流れた。

「えっ!? ...!!」

「テレポート（瞬間移動）。こないだ、卵でやってみせたでしょう」

「え、ええ...」

再び旧市街の奥である。

「あそこ」

素早く建物の陰に寄りながらサキは街路の一角を指さした。

新市街に比べるとあきれるほど丈の低い、三階建て、四階建て、といったビル群の中央に、ぽっかりと直径百メートルくらいの空間が開いている。

「... “アテナルラ”（中央広場）だ。話には聞いてたけど...」

リスタルラーナ系の開拓惑星には必ず見られる場所だった。曰く、“この星に初めて人が降りた土地”。

はじめのうちこそ市街造りの中心ポイントとされ、住民の集会の場となるのだったが、やがては例外なく旧市街の奥に忘れられる。

通常、人の乗ってきたランチ（上陸艇）が半ばモニュメント化されて広場中央に飾られているものだ。

が、ここではとっくに取り除かれて、十分な空間は極秘のスペースポートへと改装されていた。

「まさかこんな盲点をつかれようとは思ってなかったよ。ずっと、山岳地帯とか軌道上とか、いかにもアジトがありそうな所ばかり探ってたんだけどね」

「...密輸...?」

「そう。かなり悪質な、ね」

「...あなたは...」

「え？」

「もしかして特務部隊員なんですか？」

「あはっ」

茶目っ気たっぷりに白い歯を見せた。

「そう見える？ 確かにこういう特殊能力を生かすためには向いた職業だとは思うな... もっとも特務部はわたしらの存在なんか、まだ夢にも知らない筈だけど」

「..... まだ？」

「ふふん。全くの民間人ですよ、今のところ。」

言いながら時計をのぞく。

「そろそろだな。あのね、今夜の取り引きを連盟保安局に発見させて、逮捕して貰っちゃおうってのが、作戦なんだけど」

二人の居る所から広場をへだてた反対側の塔。

そこに、レーダー・ジャマー（探知波遮断装備）が仕掛けてあるのである。

(( ... 見える？ ))

「わっっ!!」

脳の奥にいきなり、行ったこともない部屋の光景が現われて、ティルニーは叫んだ。

塔の管制室内部の様子である。サキが透視して送り込んだのだ。

(( わたしが注意をひきつけるから。隙をついてあのスイッチを切って ))



頭に直接に響いてくる言葉に彼はあいまいに肯く。

この距離で、あんな小さなものに、うまく“力”が届くだろうか...？

(( 大丈夫、ティルニーなら。自覚ないだろうけど潜在能力はA級なんだよ ))

鮮やかな微笑を残して、痛む腕をかばいながらサキ（少女）は飛びだして行った。

(※ハック：コンピューター犯罪)

(参照したければ資料)

<http://85358.diarynote.jp/201701061344506146/>

<http://85358.diarynote.jp/201701061344506146/>

2017年1月6日 [http://85358.diarynote.jp/?theme\\_id=18](http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18)

(8)

その後のことはよく覚えていない。

ただ、ティルニーとしては、何とかうまい瞬間を捕えてジャマーを解除できたようだ。

誰にも気づかれないうちにスイッチを倒し、ついでに二度と使えないよう、思いついて内部の配線をひき千切っておいたりする。

肩を叩かれて振り向くといつの間に戻って来れたのか、気配もなくサキが立っていた。

心持ち顔色が悪く、腕の包帯には血がにじみはじめていたけれども、まあ、無事だ。

「...どうなったんです？」

「ほら」

何も知らぬげに見慣れない型の宇宙船が着陸しようとしていた。

見たこともない筈だ。そもそもリスタルラーナ世界では大気を破壊するような駆動機関の船は造られない。

外洋宇宙船が直に重力圏内に降りて来るということ自体、信じられないような話なのである。

「...一体...」

「ジースト船だよ」

サキはあっさりと言った。

「ジースト?! あの!?!」

四年前にファースト・コンタクト（第三種接近遭遇）があり、昨年、一応の友好通商も含めてリスタルラーナ星間連盟との正式な国交が成立したばかり、という謎だらけの宇宙帝国である。

情報もあまり流れないので一般市民にとっては殆ど慣染みがないが。

「連盟の“首都惑星”からジースト帝国“本星”への直行ルートもここからじゃ遠いしね。映画の中のことみたいに感じてるんだらうけど、...ところがさ。

実はこのリネアラインって星は両世界間の国境が一番狭まる所に位置してるんだな」

「え。...」

間にガス雲をはさんで長いことお互いに気づかずに来たのだ。

辺境同士、距離的には目と鼻の先といったほどに近い。

「おかたい政府よりも犯罪組織の方が対応がハシコ（早）かったってわけ。ジーストでは連盟世界の技術を一刻も早くって手に入れたがってるからね。

...この星も、もうあまりのどかにしてもいられないんじゃないかな」

「...貿易の中継港になる、...と?」

「必然的にね。」

肯いてサキは真っ直ぐにティルニーの眼を覗きこんだ。

宇宙船の方では何か不都合な事が発覚したらしく、人の動きが慌ただしくなっている。

「わたしは **これが**片づいたら今日の最初の便で発つことになると思う。で、今のうちに尋いておくけれど、最初の日にわたしが言ったのの、答え」

「……………ああ。」

ティルニーは殆ど自分と同じほどに背の高い少女の瞳を見返して、ちょっと困ったような静かな微笑を浮かべた。

「伯父貴がね、結婚しろって云うんですよ。」

太った腹を揺すって店主は威勢よく主張したのだった。

二十七にもなった一人前の男がいつまでも佻しい身の上でいるものではない…と。

「結婚して、子供つくって、店を継いで。…年が上だけどリスナはおれを気に入ってくれてるみたいだし。」

「……いいね、うん。とつても。」

サキは鮮やかにこたえて安堵したように白い歯を見せた。

それこそが、何千年来となく続いてきた人間の“日常”というものだったから。

「実のところ、そう言ってくれるのを期待してた。あなたがここに居てどうしても不幸だっというんなら別だけど… 多少の特殊能力があるとは云え、結局はわたしらだっ普通の、ごく当たり前なだけの人間なんだからね。」

淋しい連中同士で閉じ込もってしまおうとする心は、とどのつまり何の解決策をも産み出しはしないのだ。

「…済んだぜ、サキ。」

空気が噴き出すような音とともに傍らにいきなり人間が湧いて、ティルニーは一瞬あわ

てて飛びすさるところだった。

「わっ!!」

「.....レイ ♪」

「はん... こいつが助っ人？」

上から金色の無遠慮な目で眺めまわす。

色の白い、異様に背の高い少女だった。(そういえば成人男子のティルニーと殆ど同じだけあるサキだってかなりの長身なわけだが。)

青い髪。金色の眼。

とがった長い耳。

「...確かにA級だけど訓練がなってないな。コントロール出来ないエスパーなんざ、マッチ持った赤ン坊と同じだ」

「こら。もう、またァ」

いつもこれだ、といった調子でサキが不作法をたしなめる。

「ティルニー。これが相棒のシスターナ・レイズ。レイだよ。船の側の組織を潰しに行っ  
てたんだけど。」

「...ジースト...人。ですか？」

彼にとっては映像でなしに見るのは初めての事なのだ。

「ああ...正確に云や、ジースト・ゼネッタ。」

「“ゼネッタ”？」

「超能力者の総称だよ。人口の三分の一はいるかな、帝国には」

「...！」

「ただし殆どはD級以下で、被差別種族にされてる」

公式には報道されたことのない話だ。

ティルニーは、今夜は、考えることが山程あるだろう。

「...あ、」

空に浮かぶ無数の、赤やオレンジの明かり。

時ならぬ恒星船の大気圏突入に、慌てふためいた惑星警察が、続々と集まりつつあった。

.....。

そして、夜明け...

「じゃね。ティルニー。何かあったらいつでも連絡してよ」

サキは一旦荷物を取りに戻るとあっさりと笑って朝霧の街に姿を消した。

「エスパー同士の横のつながりを創ろうと思うんだ。寂しくないように、より自然に社会に溶け込んでいけるように。」

間の抜けた話だが、ティルニーはその時はじめて彼女がリストラーノではない事に気がついたのだった。

あまり自然にしているから判らなかったのだが、異邦人...星間連盟が17年前に、そして史上最初に国交を結んだ、“テラズ”＝地球系星間連邦の人間だったのだ。

...動きはじめた、本当の宇宙時代。

と、彼は思った。

地球。リスタルラーナ。ジースト星間帝国。

その、それぞれに、違った立場の、超能力者たちがいる。

(( ... 結局はわたしらだって普通の人間なんだから。... ))

いま、陽がのぼる。

大きな十字路の中心に立って、ティルニーはいつまでも少女達の姿を追いかけていた。

... “惑星の夜明け”、了。...

(※欄外メモ)

- ・とんずらこくのと船内の様子のはなし。
- ・マッチ持った赤ん坊
- ・“エスパッション”にかえられる、ということ。

(参照したければ資料)

<http://85358.diarynote.jp/201701061411102568/>

<http://85358.diarynote.jp/201701061411102568/>

2017 年 1 月 6 日 [http://85358.diarynote.jp/?theme\\_id=18](http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18) <http://85358.diarynote.jp/201701061411102568/>





(没原稿)



(没原稿)

(没原稿)

「星の夜明け」 by 恒沙真谷人 (没原稿・A)

STAR-RISE

Dream of ... (仮題)

星の夜明け。

by 恒沙真谷人

このところ奇妙な、考えられないような犯罪ばかりがあいついで起こる。

新聞誌上世間を騒がしている。

いわく、袋小路まで追いつめられた犯人が忽然として姿を消した。

厚さ何mという金庫の扉が道具も使わずねじ開けられた。

侵入者の形跡もないのに大宝石店から、金目の品ばかりがケースからある日なくなってしまった。

...etc., etc., ...

これらの記事を読むたびに、都市の雑踏や、人口の薄い農村、開拓途上の惑星バラックの中などに、目立たずひっそり溶け込んだ1部のある人たちは、誰にも云えぬ不安を胸に抱えてそうっと周囲を見まわすのだ。

無論、彼ら自身はみなこの上もなく善良で、穏和しく、家禽餌用草食動物のように優しい、少しおびえたような瞳をして、毎日を1人静かに暮らしているのだったが...

それでも世間が頻発犯罪の不可思議な手口について激論を交わし、首をひねるのを見る度に、なんの罪も落度もあるわけではないのに首をすくめて笑顔を誤魔化さなければならぬ。

…彼達とは、つまりそういう不運な時代の人たちだった。

act.1 朝まだき

店の主人の態度に気づいたサキは1瞬思わず速報レコルダから目をあげた。

他の場所、他の人たちの上に幾度も幾度も見覚えのある…あの表情。驚愕と、恐怖と、不信と。

ぎくりぞくりとして冷たい記憶の感覚が身うちを走る。

それから、間をおいて、その緊張が自分に向けられているわけではない、事に了解し、ほっと力を抜いてレコルダに注意を戻す素振り。

されいげなく心は主人の視線を追う。

彼の未知のものへの生理的嫌悪のサキには1人のうだつのあがらない青年がいた。

貧しい風体からしてこの安宿も兼ねた食堂の下働きといったところなのだろう。

かなり瘠せて腕も脚も骨ばってゴツゴツした感じなのが無器用そうだった。

中背。陰気な顔つき。

だけどそんな地道な使用人の何処が主人のあれ程の拒否反応に値するというのだろうか？

彼女はすぐに理解した。

彼の右脇、すぐ上の棚のところから、こんな店にしてはかなりの上物そうな皿が1枚落ちかかっている。

いや... 現に **落ちて**いる のだ、時制的には。

縁の1辺をいまだ未練がましく棚に触れさせたまま、奇妙に現実感のあるバランスを保って、高い皿は力学法則を頭から無視しきっていた。

悠然と宙に浮いていた。

青年は白ちゃけた顔をして動くに動けないでいる。

意識せずにやってしまった事なのか、それともまさか店主に見つかるとは思っていなかったのだろう。

高価な皿なのだ。

事態を数瞬のうちに判読してしまうと、どうするべきなのかちょっと迷った。

表情を読みとりにくい灰色の瞳がひょいと不機嫌にすがめられる。

顔をしかめ、色の薄い舌が軽く唇をかすめ...

不自然な均衡を破られて皿はハデな音をたてた。

人気のない室内の、3人だけの間で、呪縛が解ける。

「... マスター！」

彼女は食べ終えたセット・メニューの盆を押しやりながら無雑作に立ち上がった。

「部屋、借りられるかい。いつまでかは判んないけど、とりあえず10日分払うよ。」

商売人はこういう上客がいる時には立ち直りが早い。

「じゃ、そのあなた、案内してもらえないかな。」

(参照したければ資料)

<http://85358.diarynote.jp/201701061722222575/>

<http://85358.diarynote.jp/201701061722222575/>

2017年1月6日 [http://85358.diarynote.jp/?theme\\_id=18](http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18)

## 「星の夜明け」 (没原稿・B-1.)

その未明、惑星の宙港にまだ若い女が1人、降り立った。

とりたてて特徴もない、どちらかといえばむしろ貧弱な星である。

首都惑星の存在する宙域からは遠く離れ、かと云って辺境開拓惑星と称される程の若さとバイタリティもとうになく、主要な星同士を結ぶ賑やかな定期航路の大型船の行き来からも、あと少しというところで外れてしまっている。

そんな中堅どころの下ぐらの惑星に、その女は着いたのだった。

女...と、1口に云っても、まだかなり若い。

少女、とか娘、と呼称した方がむしろ似つかわしく思えるくらいの年頃なのではないだろうか。

だが、まだ明けきらない宙港のゲートへと、中型の古ぼけた定期貨客船から歩み出す姿には、少女という言葉の連想させる年相応の未熟さ、危うさ、等といったものが殆どといっていいほど感じとれないのだった。

彼女は落ちついて、虚勢を張るでもなく静かに堂々としていた。

ゆったりとした歩き方はあきらかに己れの実力に対して小揺るぎすらすることのない自信を抱いているもののそれである。

それは、能力に合わせて早い時期から専門的な方向づけに沿った職業教育をほどこされるこの世界においては、それほどに珍らかな事でもないのかもしれない。だがそれにしても、ごく年若い彼女の無雑作だがムダのない一挙一動は、真に見るべき眼を持つ者なら、うならせるに足るものだった、と言っておくべきだろう...



朝まだ来の宙港構内にはかすかに白い霧が残って漂っていた。

この時間でも星間航路のロビーにはいくらでも人がいるものである。

人混みの中に紛れこんだ後も彼女が変わることなく淡々と歩き続けて行くと、彼女の容姿が決して目立つ、というものではなかったが、通り過ぎられたその後には必ずといっていいほど、いくつかの振り返る視線が見受けられるのだった。

まるで淡い光を発して妖精がそこを歩いて行ったのだというように。

…確かに彼女の長い髪の薄灰色はこの世界では見られないもので、（それは彼女の故郷の地に還ったとしても何ら変わる条件ではなかったのだが、）見る者の目に奇異の感を与えるのはむしろ当然と云えたのかも知れない。

しかしもしここで彼女に振り返った者を誰彼となくつかまえて尋ねてみるとするなら、むしろ問われて初めてその髪の色不思議さに思い至る人間の方が多いのではないだろうか。

それほどに、灰色、という色彩は彼女の頭部を飾るのにこの上もなくふさわしく似合っていて、それがカツラであるにせよ地毛にせよ、他の色の彼女を容易には想像し難い程であった。

彼女自身はその長いふわりとした髪をうるさがって、後頭部高くで1つにあっさりと結わえつけてしまっている。

なにかが妙に思えるのは、淡い灰色の1本1本がとても細くて半透明に透けるように見える、前髪ともつかないあたりのセミ・ロング（はんばな長さ）の毛が、薄く1面に彼女の顔の左半分を覆って肩のあたりまで流れて、その瞳を半ば以上かげに隠れたぼんやりとした存在にしてしまっていることだった。

彼女はスタスタと、年頃の少女としてはかなり大股の速足に、時折りチラと目線を上げて天井のディスプレイ（案内板）を確認するだけで、自信を持って歩いて行く。

左手に中型の銀のスーツケースがひとつ。ショルダー？

そのあっさりとした地味な、かなりボーイッシュな服装ともあいまってだが、結構ゆたかで形の整った胸のラインにも関わらず、彼女は、性別を殆ど感じさせられない存在だった。

化粧っ気など葉にもしたくなげな剽悍な表情。と同じく、メンドクサイから置いて来ましたといった感じで、云々ゆるセックス・アピールというものが見事に欠落しているのである。

だから、すれ違った彼女を振り返って、その後しばらく見惚れて立ち止ったりする人影の多くはむしろ、彼女自身と同年代の若い愛らしい娘たちであった。

男性は大抵が、飾り気のない清潔な顔の造作にひととき好意的な目を向けただけで、歩み去って行ってしまうのだ。

ひきかえに、少女たちは...この夢見がちで優しい、鋭敏な感受性の持ち主たちは...彼女の秘めている奥深い人間的な魅力を、誰も1目で適確に見抜いてしまうのだ。

無論それと同時に、外見的な性質も、異性の好奇心よりもむしろ同性の純粋な憧憬を誘うにふさわしかった事は否定ができないが。

スラリとして無駄のない体躯をしていた。

さきほども書いた様に彼女の体が決して女性らしいラインを備えていないというわけではない。

よく使い込まれ、鍛えられた機能的なフォルムは、余分な肉の1片をもこそげ落とした、むしろ人も羨む完璧なプロポーションとなっている。

ゴツゴツと不必要に筋肉ばるのではない。

ほっそりとなめらかな曲線の内に、どんな用途にも耐え得る最高の強靱さと瞬発性が秘められているのである。

その不屈さは彼女の故郷である星の、今はもう殆ど絶滅してしまった、“ヒョウ”という名の美しい肉食動物に、相似していないこともなかった。

こう書くと彼女がひどく物騒な存在であるように聞こえてしまうのかも知れない。少女達の目をひきつけながら人混みの中を真っ直ぐと歩かせておくにはあまりにも危険な存在であると。

…確かにある意味においては彼女はあきらかに危険な人物だった。

水面の上を渡るかのような歩きぶりからは、誰も彼女が10 cm以上に近いハイ・ヒールの長靴を軽やかにはきこなしているのだとは気づかない。

そうでなくともじゅうぶんに背の高い少女であるようだった。

いうならば彼女は、その場に居合わせた全ての娘たちとは、ありとある意味で対極に位置しているのだった。

少女でありながら決して女ではない。

柔らかな外見の代わりに、何事をも自由にこなせる、精悍で生命力にあふれた実のある肉体。

その表情の中心をなしている、髪と同じ薄色の瞳も、追っているのは漠然とした夢や憧れなどではない。

彼女が真っ直ぐに見据えているものは、実現の可能な確とした理想。

彼女は少女の外見を持ちながら、同時に、いつまでも大人の男にはなり切ってしまう事のない、永遠の少年の魂をも兼ね備えているのかのようだった。

彼女の歩みは単に粗暴なのでもない。

中世的とかニュー・ハーフ風であるというのでもない。

性を超越した、純粹に1個の“人間”としての、自然で静かなあたりまえの自己主張だった。

あるいは彼女は究極的には男女の性別のわずかな相異など、たいした意味を持つものではないのだと、その齢にして既に本能的に知ってしまったのかも知れない...

数人の、めいめいがそれなりに魅力的で実力もある少女達の熱い視線を知ってか知らぬか。

彼女は拾いロビーを突っ切ってカウンターにまでたどり着くと、審査と申請と入国手続きとを済ませて、ごく何気ない顔をして惑星の朝の中へと踏み出して行った。

すぐと少し古ぼけた街なみの内部へ、溶け込んで消えてしまう。

この星へ訪れるのは初めてではないのか、それとも船内であらかじめ地理を頭に叩き込んで来たのか。...

無雑作で自身に満ちた彼女の名前をサキという。

正しくはサキ・ラン。

更に言及するならば故郷での登録名称はサキコ・ラン＝アークタス。

その名の形式が示す通りにテラザニア（地球系開発惑星連邦）の出身の人間だった。

齢はまだもう少しで17にならない。

「...宿を探すには早過ぎる時間だな。...」

軽く呟くように1人言ちて、サキは下町へ、裏通りへと、いまだ動き始めない自走路の上を、長い距離を区にするでもなく歩き続けていく。

何故、けして貧しい身なりではない年頃の娘が、好んで場末の町並を求めて行かなければならないというのか。

最も金のかかる特急の星間定期船を選んでこの星へやって来た事からも、理由が「安宿探し」という尋常一様のものでない事は明白だった。

そもそも一介の地球人の少女がなんの目的で今頃、このリスタルラーノ系星間連盟の一惑星上へ現れたのだろうか。

各個の能力に応じて出来得る限りの早期就業、こそを社会の通念としているリスタルラーノの人間ならばいざ知らず、教育年限の長い地球の人間なら未だ彼女は学齢を終えてはいないのではないだろうか？

留学生、という存在が何の変哲もない地方惑星の上でも一般化されるほどには、未だ2文明圏の交流は深く浸透しあっていない。

「...あ！ おっと nice place。」

まずは腹ごしらえとばかりに、早々と開けている場末の朝食屋へと、彼女は吸いこまれて行った。

だがしかし1見まるで呑気に過ぎる程に思えるサキ、実はある重大な目的を帯びて1つの物事を追いかけている最中なのである。

それには、泣く子も黙る裏面の連盟警察機構・保安局特務部...の力さえも関連して来ている事なのであるが、いま（この話）はそこにまで言及しているヒマがない。

とりあえずは表面的な彼女の動きをだけを追って行くでしょう。

.....。

(参照したければ資料)

<http://85358.diarynote.jp/201701061741494897/>

<http://85358.diarynote.jp/201701061741494897/>

2017 年 1 月 6 日 [http://85358.diarynote.jp/?theme\\_id=18](http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18) <http://85358.diarynote.jp/201701061741494897/>

## 「星の夜明け」 (没原稿・B-2.)

2流の地方惑星。とはいえその恒星系の中では最大の人口集積地である。

大気成分も気候風土も長年にわたる人手の介入によって、ほぼ、リスタルラーナ文化圏における人類発生の地... 現在では連盟の機構の大部分を集める一大中心地と化した首都惑星・リスタルラーナ... となんらかわらないものとなっている。

運良く恒星系内での完全な農・鉱的自給自足が可能で、ためにかえって他星系との往来が鈍りがちだという欠点はあったが、それでも結構古い歴史と豊かな風土に恵まれた、1本国民気質の通った良い星ではある。

その、リ(惑星)・アイラン上の宙港の隣接都市と云えば、これはもう文句なしの首都。

リスタルラーナ(本星)育ちのサキにして見れば生活様式の少し古めかしさが弱冠鼻につかぬでもない、という程度の感想くらいしか抱きはしないが、それはまた別問題で、数億のオーダーの人口を持つメガロポリス(巨大都市)である事に違いはなかった。

半ば以上老朽化しきっているとは云え、まだ、首都惑星上のいくつかは、かつてそうされたように全面的本格的な移転改築が必要だという程でもなく。

林立する高層建築物の集合体は、時代の新しいものになるにつれ、いっそうその超絶的な高層化が激しくなる。

その下に、段階的に、時代を逆上る程に背が低く安々した形になりかわる構造物軍が埋もれている。

この街もどうやらリスタルラーナ文明圏に共通な、雑多で無計画な発展性を示して生きてきたようだった。

いびつな放射円状に、開拓惑星として最初の入植者の作ったコロニーの名残を小さな古墳塚のように記念館化したものがコア（核）。

それを円心として、遠ざかり高まるほどに新しい構築物が見られる、という次第なのだ。

古い側に行くほどスラム化が進む。

数量的にも技術的にも、都市が過飽和ストレスに達してしまい、新たな拡張風景が見られることがなくなってから、もうずいぶんな月日が流れていた。

都市底低部の朝まだき。

蒼暗い半闇のはざまにはいつもほの白い露のかけら。

突っ切ろうとすれば見えなくなる。蹴飛ばそうとすればどこかへ消えてしまう。

そんな不確かさがケルニーは好きというでもなく気に入っていた...同じ“霞”（ケルニー）という名のよしみで。

ゴミ処理場まで直結の大型コンプレッサつき集積場は数丁先。

毎朝歩いて数往復。

店から集積場への中型コンはここ数十年来うごいたことがない。

そんな程度にかび錆びた区域にケルニーの働く小さな伯父の店はあった。

そんな都会の底辺部の1画。

いまだ完全には湿気とキナ臭さとの混在するスラムの泥水だまりと成り切ってしまうているわけではないけれども、ある程度以上の収入を持つ、自称まともな階層の人間ならば、昼間でも出来得れば近寄らずに済ませておきたがる、といった風なあたりに、これ



は大都会にはつきものの怪しげな日銭稼ぎの労務者どもや、1 発屋、スラムと高層街の夜をとりもつ女街... などの人種が主に利用する、安宿も兼ねた、貧しいが比較的清潔な、... つまり深夜の酒と女っ気は抜きの... 1 軒のメシ屋があった。

長い灰色の髪を後頭部高くで素っ気なくくくったまだ若い娘が、恐れる気配もなく踏み込んで行ったのが、つまりはこの店だったのである。

サキ程度に身なりも物腰も丁寧な少女が1人で出入りして、決して安全といえる様な場所ではなかった。

にも関わらず彼女は古巣に戻ったかのように落ち着き払って空席に腰を降ろす。

「ティレイカ (※)。それとファッシミルとジョイナーキ下さい。」

薄汚れた店の中で、1人天上界から舞いおりて来たばかりのような淡い光を放っている瘠せた娘が、余りにも自分がそこに居て当然... という顔をしてそれきり動かなくなってしまったもので、まだ数の少ない早朝の食事客たちが彼らこそは場違いのドブネズミなのではなかろうか、と、1瞬錯覚をきたして慌てて首を四方へと巡らせた程だった。

狭い、不潔な、いかにも掃除の手などの行き届かない、安っぽいいつもの店内である。

「ねえ...？」

性別を感じさせない彼女はいぶかしげに小首を投げた。

「あっはいっ。..... な、何にしますか？」

店の奥で皿ふきの手の停まってしまっていた青年が思わずもの慣れぬ丁寧語などを口走ったせいで、常連らしい労務者風の1人から失笑が洩れた。

止まってしまった時が動き出す。

丁度喰い終えた何人かが出て行き、また何人かの客が来る。

「...ティレイカトファッシュヨミルとジョイナーキィ。お茶（ティレイカ）少し濃いめにしてももらえるかな。...全部でいくらになる？」

リスタルラーナ似んの一般的つつましやかな朝食メニューを、彼女は別段イヤな顔もせず繰り返した。

よどもためらいもなく云うあたり、テラズ（故郷）を離れてのこちらでの暮らしも相応に長いのだろう。

もっとも彼女が異星人種であることなど店の中の誰もがとりたてて気づいた様子もなかった。...彼らからすればお上品で正確すぎる言葉の発音も、星海の中央風で、細身の少女らしからぬ豊かで柔らかなアルトの声である。

告げられた通りの朝食代をこの星の小額通貨で先払いしてしまって、サキはおもむろに宙港で仕入れてきた今日の速報カセットをハンディタイプ（自前）の解析機に叩き込んだ。

少し高速加減に画面に現われてくる全情報の読み取りにその場で没頭してしまう。

「ありがとう。」

運ばれて来たトレイにも、軽く会釈を返したまま、彼女はしばらくの間は顔を上げようとさえしなかった。

奇妙な話だが...

この、場末の、掃除さえ何年前に1度行われたものか判らないような店なかにあって、逆説的にも速報に熱中し始めてしまった途端に、サキ・ランという名のスタイルのいい17にも満たぬ場違いな小娘は、完全に目立たない存在と化してしまった。

いずれこの店に来るような輩なら誰も今更世界の動きなんぞに興味は抱かない。

一応ポータブルとはいえ結構大版な多機能の投影器で速報を読む、などというインテリゲンチャな行為ほどこの店の中にあつて異和感を生じさせるものも他に思いつけない位である。

それが、不思議と...

それまで浮き上がっていた彼女をすっとあたりに溶けこませてしまった。

半ば以上人生をあきらめてしまったようなくたびれた年齢の、生活の臭いのする地道で寡黙な男たちの中に、まったくの無条件で沈みこんでしまったのである。

集中するあまり... その、画面に表れる全情報量を既存の知識とつきあわせて解釈し、必要とあらばどんな多量だろうと瞬時に脳細胞に叩きこむ、という作業に... あまりにも常人の域を越えて高度に集中するばかりに、普通、人が常に発しているものである“気配”のようなものを、彼女が断ってしまった為かも知れない。

いやそれよりも、サキが目立たなくなってしまった理由は。

職業が極端に分化・専門化しているリスタルラーナ世界、誰もが管理社会の知識階級に入れるべく教育をほどこされる機構。

その中であつて、いずれ日銭かせぎにまで身を落とし、身を隠す者たちなら、皆ひとかたならずこの世の裏も表も知り尽している。

素直に幸福な世界でのみ暮らしていることの出来なかった、不運な人間たちなのである。

その、明の部分だけを見て生きてゆくことのできなかつた、ある種の不運さ... “性格”のようなもの。

世間知らずの嬢さん育ちのようにその服装から解釈され思われがちのサキも、根は同じなのだった。

はみだしもの。

平和で安全な世界、居心地のいい正常さから、追われてしまった者...

別に、その店に来る連中が、そんな風に意識してサキを受け入れたわけではない。

ただ、彼女なりの“仕事”に熱中している姿を見て、漠然とながら納得してしまったのである。

事情は知らないが **同類** なのだと。

似たような空気を身にまとっているなど。

そう考えてしまうと彼女の派手でないあっさりした服装は少しも邪魔にならなかった。

むろん、誰も灰色の髪の奇妙さ珍しさになど、気がつきも注意も払いはしなかったのである。

(※ティレイカ：リスタルラーナ風の芳香性飲料。お茶。

淡い銀青色で、イメージとしちゃ牛乳紅茶にあたるのかしら。)

(参照したければ資料)

<http://85358.diarynote.jp/201701061829211245/>

<http://85358.diarynote.jp/201701061829211245/>

2017年1月6日 [http://85358.diarynote.jp/?theme\\_id=18](http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18)

## 「星の夜明け」 (没原稿・B-3.)

サキは腰かけていた。

浅く腰をかけ、形よく...ちょっと行儀は悪く...グレーのズボンの脚を高々と組んで、その膝の上に無雑作に投影器。

一応ポータブルとはいえ、かなり大版のその多機能性は並の学生などの持つものではない。

その、多機能型ハンドメイド投影器に、彼女は先刻宙港で仕入れて来たばかりの速報カセットを放り込んであるのだった。

...世界（リスタルラーナ）の動き、平和。

どこぞの会議に結論が出たの、エネルギー節制法案の第何条に改正が加わったの、テラズ（地球連邦）からの全権大使が交替したの...そう、普通の暮らし向きをする人間から見れば、毎度なんの変わりばえもしない平凡なニュース・ソースの山としか見えはしない。

だが無論、サキの生活半径が“普通の”人間の域におさまっているかといえば、そんな筈はなかった。

速報ダネになるような世界の全ての表舞台の、裏面の動きは明日からも即、彼女の仕事に関わってくるかもしれない話である。

同時にまたその日の3大ニュースには、主役として名前の載っているどのジャンルの人物とも、...ごく私的・個人的なつながりがある。

新任の地球連邦大使にはお祝いの花束をでも贈るとして、どこのチェーン（星間商業機構）に頼むと1番安くて速いかな...なんぞという問題もついでに平行して頭の片すみで計算してみながら、サキは次々とスイッチを進めて投影器の画面を切り換えていった。

ひとつことに集中してしまうと他の事にはなかなか気の回らなくなる性分である。

おかげで、ようやく1段落ついて食事に手を伸ばした時には、せっかくの濃いめのティレイカも殆ど覚めてしまっていた。

こういう安い店のカップの保温性能の悪さを、コロッと忘れていたのである。

「あ〜あ。」

低くうなりながら飲みほし、新しいのを注文。

まだ分けグセのつききらない前髪が必要以上に顔に墜ちてくるのがひどく邪魔だった。

左眼さえ隠れればいいのである。左眼さえ。

うるさそうに横に払いのけると、すぐ脇で短い頓狂な声をした。

おかわりティレイカを持ってきた青年。

「...地球人... だったんですか？」

サキはうっすらと笑いを浮かべた。

「見えないだろ？ そうは。」

だからこそ普段は故意に耳を隠しているのである。

ふぁさ、と彼女の顔の左半分を覆って流れるセミロングの灰色が首すじに当たった。

外見上、殆ど同じ生命体にさえ見える地球人、リスター、それに、つい最近...対・地球よりもさえ10年以上も遅れて存在を確認された、ジースト星間帝国人の、もっとも手っ

とり速い判別法は耳にあった。

無論、内臓器官など詳しく調べていけばそれ以外の相違点が結構ないわけではなかったのだが...

それでも骨格や眼や髪の色にまで3者共通のものが多い3人種にあって、やはり1番、

※やっぱりスタルラーナが地球がジーストが云々ての書くの反対!!  
仮にも100pに納めようってのが初期目的なのに、  
1たんこりだしたら、  
書ききれないわけでもない。

...でも、ティルニーとサキの間柄って、

ロマンス、ないのね。

(参照したければ資料)

<http://85358.diarynote.jp/201701061958216270/>

<http://85358.diarynote.jp/201701061958216270/>

2017年1月6日 [http://85358.diarynote.jp/?theme\\_id=18](http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18)

## 「星の夜明け」 (没原稿・C.)

その未明、惑星リヤネスカの第1宇宙空港にまだ若い女が1人降り立った。

宇宙空港...ひとたび衛星軌道上にてその乗ってきた恒星間大型船に別れを告げた後、小型降下艇の外殻の冷却されるのを待って第1歩をフイ出すべき場所である。

惑星大気に害をおよぼさずに、降下・着地を行いうる大型恒星船は、まだ、ない。

リヤネスカ上の第1宙港といえば官・商の発達した首都・リヤネスカにほど近く隣接し、ために工業地区、農業地帯に比較すればはるかに荷物取り扱い量の少ない、小規模で旅客を主体とした港であった。

その、宙港の、降下艇のタラップから管制塔付随のビルの1端へ、更に各種の手続き所を経てロビー、正面玄関へと続く、1部可変式のただっ長い廊下。

そこへ今朝いちばんの降下客として彼女は現れ、ゆったりと歩きはじめた。

まだ若い女、と、いうより正確にはまだ少女と呼んでもさしつかえない時期であろう。

“娘”とした方がむしろ似つかわしく思える年代である。

だが、まだ明けきらない、夜勤明けの倦怠感と早朝番の眠気の漂う宙港のゲートへと1人歩み出た姿には、少女という言葉が連想させる年齢相応の未熟さ、危うさ、等といったものが、まったくと言っていいほどに既にみられなくなっているのだった。

彼女は落ち着いて、虚勢を張るでもなく静かに堂々としていた。

ゆったりとしたライオン・ウォーキング(歩き方)は、あきらかに己れの実力に対して小揺るぎすらすることのない自信を抱いている者の、それなのである。



自負心の源が外見の美しさ、などという浅はかなものではないことは明らかだった。

とって...

彼女が美しくない、と解釈するのは誤りである。

それは美少女という一般的な概念ともまた大きくはずれたものではあったが。

朝まだきの廊下の人気の少ない中を彼女は歩いてくる。

その無雑作だがムダのない一挙一動は、真に見るべき眼をもつ者をならうならせるに足るものだった。

ゆったりしたリズムを保って右、左、右...

年頃の少女にしてはかなりの相当な大股、速歩である独特のウォーキング。

どう見ても高度に訓練された者でなければでき得ない完璧なスタイルを持つように思えながら、その実それはプロのモデルのものでも、運動選手、舞踊家、格闘技やその他の武術をたしなんでいる者の動きでも、ない。

あまりにも自然流に身につきすぎて、そこからおさと（職種）の知られるような生はんかに雑作のある挙止ではないのである。

しいてと、ならば、それらのどれをも深く修めているような、とでも言うか。

まったく弛むことすらない歩きっぷりである。

見事と誉める以外ない。

それだけの歩行法を修めながらなお、本人まるきりの無自覚で、あっさりと少年のように空間をかきわけて行くのも、また爽快であった。

空調の油断でか宙港構内にはほのかに白い朝霧がいくばくかまぎれこんでいる。

複数の自動検疫システムをくぐり抜けて、この時間でも星間航路行きの待ち合わせロビーにはいくらでも人がざわついていた。

明るめの灰色のストレートのパンツにアイボリー・ホワイトのちょっと形の変ったジャケット。あっさりとした地味な、かなりボーイッシュでもある服装は決して目立つというわけでもない。

人混みの中にまぎれこんだ彼女が巧く混雑を泳ぎ抜けながら変わらず淡々と歩き続けて行くと、それでも幾人かは確実にふっと振り向いて見るのだった。

まるで... 光を発しながら妖精がそこを通過していったのだと、いつかのように。

珍しい薄灰色をした長い髪をしている。

(参照したければ資料)

<http://85358.diarynote.jp/201701062017337532/>

<http://85358.diarynote.jp/201701062017337532/>

2017年1月6日 [http://85358.diarynote.jp/?theme\\_id=18](http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18)

「惑星の夜明け」 (没原稿・D-1.)。

“エスパッション”・シリーズ vol.1.

ほし (惑星) の夜明け

... A Dawn of A Planet ...

遠野真谷人

... 惑星リネアライン。

リスタルラーナ (星間連盟) 世界 の大国同士を結ぶにおける主要航路からは大分はずれた、辺境のほし (惑星) である。

生活品のほぼ完全な自給が可能のためにかえって他恒星系との交易が遅れ、これといった特産物とてなく、中央のニュースからも遠い...

そんな、おおどかで、沈滞した社会。

うらさびて老朽化の目立つようなスペースポート (宙港) に、その未明、少女がひとり静かに降り立った。

首都は、霧である。

十数年来死んだままの店舗用ゴミ処理器の、出すとシュートの裏側から幾つもの生ゴミ

袋を引きずり出しながら、青年は、細かな水滴の冷たさを気にするというのでもなく、見るとはなしにその霧の冷たさを肌で受けとめてきた。

戸別の店舗用ゴミ処理器はこの十数年来というもの動いたことがない。だから、毎朝一番に数丁先の集積場...処理場まで直結の大型コンプレッサがある...へ、生ゴミを両腕にぶらさげて数往復するのは、長年の彼の日課だったのだ。

黙々と青年は歩いていく。

林立する高層建築物の集合体は、時代の新しいものになるにつれ、いっそうその超絶的な高層化が激しくなるものだ。

その足下には、建造年を逆上るごとに背が低く安定した形へと変わってゆく、旧市街を埋もれさせて。

この都市もどうやら歴史の古いリスタルラーナ系の文明圏に共通な、雑多で無計画な発展性を示してきたようだった。

最初の入植者グループがもう二～三千年もの昔に造った小さなコロニーの名残を核として、いびつな同心円状に、新しいもの、新しいもの、と建造物をかさねていく。

都市の交通機関もまた円型を常として発達し...

やがて物理的な限界に達したビル群が新たなコア（核）を見つけてそちらへ移り流れるまで、取り壊されることのない古い中心市街は、少しずつ、スラムと化していくのである。

七階より高い建物とては見当たらないこのあたりで、青年も、青年の母や父も、生まれたのだった。

少女はスタスタと、その年頃の娘としてはかなり大股の速足に宙港の構内を横切って

行った。

建物の内部にさえ何故からか白い霧のひとかけふたかけが紛れこんでいるこの朝まだき、長い廊下の自動走路は未だ目覚めていない。

彼女と同じ船便で着いた数少ない旅行者たちは皆、宙港のサービスの始動を待つて税関前の客溜まりに腰を据えている筈である。

走路が動けば三分で着くものを、わざわざ十五分かけて歩こうという物好きは、普通、いない。

始業の準備をする宙港グランド・ホスト（地上要員）の奇異の視線をまるで無視して、少女はその足でやはり走路の眠ったままの市街区へと、平然と歩み出して行ってしまった。

（…ふう。結構、歩いたなー。）

彼女が足を停めたのは自転のゆるやかなこの星で、深夜というに近かった早暁からようやく高いビル群の頂きが朝陽の金色に染まろうかというほど、時のたった後である。

この刻限、中流以上の階級が住まう新市街では個室ごとの明かりすらないが、スラム化の始まっているこの辺りは朝の早い労働者やあるいは夜業明けの者などで、思うより人出の多いものである。

（うう。お腹が空いたァ。…）

もとより別段急ぎの用があって歩き通したわけでも何でも無い。

ただ単に幾日もの船旅で溜まってしまった運動不足を解消したかっただけの事なのだ。

労働者相手の一軒の場末の朝食屋が開いているのを見つけて、少女はためらいもなく

入って行った。

(...騒がしいな。)

いい加減、ガタのきた機械のかわりに手で大量の皿を洗いながら青年は顔を上げた。

さして入っているわけでもない早朝の安い定食めあての客たちが、妙に、一斉に、ざわついているのだ。

その原因に気づいた青年は一瞬ポカンと口を開けた。

.....少女である。

象牙色のざっくりしたジャケット、淡灰色の、体にぴったりとつitted細身のパンツ・スーツ。

およそ色気には縁遠い、あっさりしたなり（服装）の、けれど仕立てと素材の良さが、その少女の階級...金のある...を示していた。

こんな貧しい食べ物屋にはどう考えても不釣り合いな人種である。

が、まあ、それだけなら、迷い児になった、とか人をでも探しに来ているとか、説明をつけられない事もない。

食事客たちを落ちつかなくさせているのは、少女が、あまりにも物慣れた風で自然に振る舞っていたからだったのだ。

育ちの良さげな娘がいかにも自分はここに居てしかるべき人間だ、という顔をしていると...

常の、馴染みの客である筈のくたびれた作業衣の男たちの方が、どこか場違いな所でも踏み込んでしまったのではないかと、つい、あたりを見まわしてみたくってしまうのである。

しかし青年を呆けさせたのはそれだけではなかった。

美しかったのだ。

いわゆる、その年頃の少女らしい華やかさ愛らしさというのではない。

一本芯の通った、内奥からにじみ出る知性の高さ。やさし（理解深）さ。

“気品”のようなもの…。

将来の見通しの薄い下街には若者、殊に若く美しい娘たちの姿は少ない。

(…なんて…)

そうして、たっぷり二分ほども、青年は少女を見つめていた。

一隅に席を占めて少女は注文を出す。

「ファッシュミルとジョイナーキィ。ティレイカ（お茶）、2. 5 mg 濃い目にして。」

卓上のメニュー・コンピューター（注文器）に音声入力して清算スリットにカードを入れようとする。

と、作動しない。

「？」

コンコン。

お〜い、という感じの、妙に子供めいた仕草でディスプレイを弾く。

「、あ！」

ようやく正気にかえって、慌てた声で奥から人が出てきた。青年は洗い場からとびだした。

まだ泡をふきのこした手でメモを取る。

「すみません、ここ、注文体こわれてんですよ。ええと...現金払いになっちゃうんだけど...」

こんなお嬢さんが今どき邪魔になる小額貨幣なんぞを持ち歩いているだろうか？

「現金ね。あるよ」

スタイル（服装）にあったちょっと少年ぽい笑いかたで動じもせず注文をくり返すと、公けの通貨ではない一番はした（端下）のテレス銭まで、きっちりとそろえて少女は払った。

よくも上層新市街の人間が、持っていたものだ。

（ティルニー。

A boy meets a gir. ... 一種の青春小説として？）

（参照したければ資料）

<http://85358.diarynote.jp/201701062149142617/>

<http://85358.diarynote.jp/201701062149142617/>

2017年1月6日 [http://85358.diarynote.jp/?theme\\_id=18](http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18)



「惑星の夜明け」 (没原稿・D-2.)。

サキはいつだって下町でのしごと(任務)が好きだった。

「...こりゃあブラスター(熱線銃)の傷じゃないですか」

部屋に連れかえって手早く止血しながら、ティルニーが驚いて言った。

「あれ、...判るの？」

「この辺はスラム(暗黒街)にも近いですからね。考えてみりゃお客さんみたいに金持ってそうなお嬢さんが、一人で出歩いていい場所じゃないんだ」

気づかず、止めなかった自分に、半ば腹を立てている口ぶり。

「こりゃ、おれなんかの応急手当くらいじゃ駄目ですよ。直ぐ医者を呼んで来ますから。お客さん」

「サキ、でいいよったら... 医者なんかいらない。」

どさっ。

ベッドの上に上体も倒すと、蒼白な顔のまま彼女は眼を閉じた。

「なにか痛み止めを。...まともに治したらいったら塞がるまで一週間はかかっちゃう傷だからね。急ぐんだ。これっくらい、自分で治してみせる。」

「そんな事いったって出血がひどかつ...」

「もう止まったもの」

サキの腕の周囲に渦まきだした何かのエネルギー、“場”のようなもの、を感じとって  
ティルニーは仕方なく納得した。

これは卵を“跳ばし”たりするのと同じ種類の能力なのだ。

翌朝、薬と食事を持って訪ねてみると彼女はもう起き上がって出掛ける仕度をしていた。

「...サキ。」

「あ、有難う。」

未だ包帯をしたままの腕には動かすたびにかなりの苦痛が走るようだったが、肌には  
すっかり暖かい色合いが戻っている。

平静な顔。

「大丈夫なんですか？」

「何が」

「起きたりして」

「うん。実はあんまり」

(参照したければ資料)

<http://85358.diarynote.jp/201701062200132651/>

<http://85358.diarynote.jp/201701062200132651/>

2017年1月6日 [http://85358.diarynote.jp/?theme\\_id=18](http://85358.diarynote.jp/?theme_id=18)

(設定資料)



ケイニー。無気味がられて両親には捨てられ、叔父のところで働く。

<http://76519.diarynote.jp/200704220116290000/>

2007 年 3 月 7 日 [http://76519.diarynote.jp/?theme\\_id=5](http://76519.diarynote.jp/?theme_id=5) <http://76519.diarynote.jp/200704220116290000/>

「動物は好きなの？」

「正直だから」

「ウソだね。あなたは人間も好きはずだよ、違う？」

ケイニー。無気味がられて両親には捨てられ、叔父のところで働く。

極上の紅茶にめいっぱいミルクを注ぎ入れたような肌の色。

.

### コメント

<http://76519.diarynote.jp/>

りす

2007年4月22日 1:09

>極上の紅茶にめいっぱいミルクを注ぎ入れたような肌の色。

.....「サキ・ランの肌の色」を評する言い回しとして定番のつもりで考えた文章が、某『伝説』の、カーテローゼ・フォン・クロイツェル伍長の髪の色表現と似てしまっているのは何故なんだ.....

まだこの頃は、銀英伝、読んでなかったはずなんだが.....☆

(^ ;)( ;)( ;)( ;)( ;)( ;)( ;)( ^;)????

(借景資料集)





奥付



## 奥付

リステラス星圏史略

古資料ファイル

7 - 5 - 0

「惑星の夜明け」

(最終稿+没原稿)

../../book/112387

著者

霧樹里守 is 土岐真扉

as

恒沙真谷人⇒遠野真谷人

著者プロフィール：../../users/masatotoki/profile

感想はこちらのコメントへ

../../book/112387

電子書籍プラットフォーム：パプー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト





---

リステラス星圏史略 古資料ファイル 7-5-0 「惑星の夜明け」 (最終稿+没原稿)

---

著 霧樹 里守 (きりぎ・りす)

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---